

## 第2章 事業2年次概観（成果及び展望）

地域との協働による高校教育改革推進事業（グローバル型）2年次が終了し、新しい教育課程の2年目を終えて、現時点での経過と今後の展望についてまとめる。

### ○「課題研究」実践について

令和4年度の高等学校新学習指導要領への移行を鑑み、昨年度より「総合的な探究の時間（課題研究）」に生徒が意欲的に取り組める方策を検討してきた。文型や理型などの種類の選択にとらわれることなく、生徒が意欲的なテーマ設定できるよう、教員の教科専門性の枠を超えた支援体制作りを図るとともに、学校教育目標に則ったグランドデザインを策定し今年度を迎えた。本校の課題研究において最も強調しているのは、生徒一人一人による主体的な研究課題の設定、そして研究過程の充実である。教員は生徒の研究過程に寄り添う伴走者として、ファシリテーター役を担うことを、職員研修や会議を通じて、共通認識を図ってきた。当然のことながら、知識の量だけではなく、答えのない（正解のない）問いに対して考え続けられるための力を生徒が身につけられるような取組を計画し、実践した。生徒の探究のプロセスは決して平たんなものではなく、「行ったり来たり」を繰り返し、思考が深まったり、視野が広がったりする。その中で、生徒が自身との対話、仲間との対話を通じて、成長していく過程を重視するような体制が構築できつつあると言える。

対象となった第2学年の生徒たちは、自分の関心領域から、テーマを決め、その中から研究課題（リサーチクエスト）を設定した。これまで答えの用意された問いに対して、それに答えるという経験を多くしてきた生徒たちにとって、自ら「問いをたてる」という経験は、想像以上に難しく感じたようである。しかしながら、生徒たちは、社会との接点も見出しながら、意欲的に取り組んだ。中でも、生徒一人一人が作成している「研究ノート」は、生徒の探究の過程が本人たちの言葉で綴られており、適宜、教員とノートを介したやり取りをしながら、中身の充実が図られた。このことは、本事業の運営指導員からも、生徒が探究のプロセスを経験できる仕組みづくりに貢献していると評価も頂いた（第2回運営指導委員会、令和3年2月5日実施）。

評価の基準としてルーブリックの策定は、昨年度からの課題であった。生徒と教員が目標を共有しておくことは、課題研究の時間に限ったことではないが、ルーブリックの策定をすることで、本校生徒の入学時から卒業時までの教育活動の指針を策定する上で、全体を見直す一つの機会となっている。ただ、生徒の自己評価と教員による評価の妥当性には検証の必要があり、「なぜ」その評価をつけたのか、生徒も教員も妥当な理由のある評価が求められる。この点については、第3章1.（5）で述べる。

### ○生徒の外部コンテスト等への参加

ここ数年、外部コンテストやフォーラムへの参加生徒数の増加が一つの成果であった。学校外における発表の場を確保することは、事業の内容に鑑みて教育効果をもたらすと考えられることから、今年度の事業計画にも盛り込んでおり、教員の指導体制を考慮しながら、内容の充実を図るべく計画をしていた。事業運営の主である教育企画部の教員が指導や引率を一手に引き受けるのではなく、各学年に委ねる部分、教科を超えて委ねる部分等への引継ぎが機能し始めていた。そのような中で、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け、各種大会が中止となるなど、足踏みを余儀なくされる場面があったのは残念である。

しかしながら、新しく企画された各種オンラインを用いた外部発表の機会や、ビデオ会議アプリの機能を用いた外部との交流に、生徒たちは果敢にチャレンジをした。初の取り組みとなった「全国探究オンライン発表会」には英語部門・日本語部門の両部門にそれぞれ2名1組の生徒が出場した。慣れないセルフ録音に苦戦しながらも、独創的なテーマに取り組んだ経緯を発表し、他のグローバル型指定校の生徒と学校紹介を通じた交流にも参加した。また県内における取り組みでは、「総合的な探究の時間学習発表会」に、オンラインで参加している。事前にポスター発表をしている様子を録画した

ものを提出し、当日は他校参加生徒及び教員からチャット機能を用いた質問に受け答えするなどオンライン上で「対話」を経験できた。指導助言の大学教授からの投げかけが、発表者だけでなく参加者全員に届くことで、他者の取り組みを自分の学びに生かす、一つの新しいきっかけになったと考える。またWWLの取り組みである、「SDGs 生徒交流会」や「国際交流イベント」には、有志の生徒たちが、ビデオ会議アプリ（Zoom）を用いて、ディスカッションのテーマの選定や広報のあり方について、兵庫県・大阪府内の WWL 連携校の生徒たちと、定期的なミーティングを重ねている。「SDGs 生徒交流会」については、関西圏に緊急事態宣言が発出されていない時であったため、参加生徒が会場校に集まることができた。オンライン上で知り合った生徒同士が、直接対面できた喜びを分かち合っている場面が印象的であったのも、このような背景が影響していると考えられる。

初めての取り組みとしては、もう一つある。第1学年の「海外交流員」の生徒が、台湾の高校生とのWeb交流に挑戦した。こちらについては、奈良県観光プロモーション課のご協力も得て、第1学年の教員の尽力もあり、生徒たちの初挑戦が形となった。英語・日本語の双方を用いての画面越しの交流は、新鮮さも相まって生徒たちの意欲的な姿が見られた。

また、学年を問わず、生徒の進路選択においても、オンラインセミナーの活用が見られた。自身の進路希望や、興味・関心の関連のあるセミナー等への参加希望がいくつもあった。例えば、将来「国境なき医師団」での活動を考えている生徒が、実際に活動された方の帰国報告会にオンライン上で参加、また建築分野への進学を考えている生徒たちが建築家の講義に参加するなど、場所を選ばず参加できる利点を、上手く活かす生徒が現れ出した。このような動きが、「課題研究」への取り組みや、その先にある進路実現に向かう力の増進にさらに貢献することを期している。

#### ○事業コンソーシアム連携強化及び地域との協働について

昨年度より一歩踏み込めたのが地域との協働である。本校は課題研究におけるテーマ設定において、必ずしも地域諸課題に取り組むことを生徒に求めているわけではない。しかしながら、生徒が学校外の方々から学ぶ機会を設けることにおいて、コンソーシアム各機関を中心に、多大なご支援を頂いている。奈良教育大学からは大学院生を TA (Teaching Assistant) として招聘し、研究手法について生徒に助言を頂いた。また同大学教授にも、専門的な視点で助言を頂くなどしている。また「防災」をテーマに掲げる生徒も多いことから、橿原市危機管理課には、橿原市の防災に対する具体的な取組とその課題について、また広報の面からも正しい情報発信を続けることの大切さについて、ワークショップも交えながらご講演頂いた。刺激を受けた生徒たちは、実際に、質問事項を送るなどしており、その取組を継続している。また奈良市内に駐日事務所のある UNWTO にも訪問及びご講演の機会を頂くなど、生徒に多くの刺激を与えて頂いた。これらの取組をするにあたり、コンソーシアム機関全体で作る共通のメーリングリストが功を奏した。情報を共有し、学校がそれぞれの機関とどのようなやり取りをしているのかを、関係者全員で、常に把握できるような仕組みができた。新型コロナウイルスの影響で、海外フィールドワーク及び国内フィールドワークが中止となる中、県内のコンソーシアム機関の協力が得られたことは、大きな成果であった。これらの取組を遂行するにあたり、地域協働学習実施支援員の存在は大きな力となった。外部との連絡調整からフィールドワークの企画、生徒の課題研究のテーマについての問い合わせや、その回答の生徒への還元に至るまで、細かいところまで配慮が行き届いた動きが、次年度以降の連携の一層の深化を可能にすると感じている。

生徒全体への還元には課題が残る。上記の内容は、主に「課題研究α」選択者の生徒対象の講座を通じたものであり、学校全体の取組に広げるべく「公開講座」としてはいるものの、参加者の増加対策には更なる工夫が必要である。分野を限定しない講座を企画し、生徒に学校外と繋がる機会を設けていきたい。

#### ○ICTの活用強化

今年度から新たに開始された取り組みとして、ICTの活用強化がある。奈良県教育委員会を中心と

なって、県内すべての国公立の小中高等学校が同一ドメインで G Suite for Education を利用できる環境が用意され、本校でも全生徒にアカウントが付与された。中でも、Google Classroom のアプリケーションの導入により、すべての教職員と生徒がリモートでの情報交換やデータ共有、連絡等を行うことができるようになったことは特筆に値する。実際、第 3 学年のアドバンストコースの生徒を対象に Classroom を開設し、4 月～5 月の在宅教育期間中にも遣り取りができたことは大変有効であった。その後も、第 2 学年の「課題研究 α」選択生徒の活動が開始された際にも同様の取り組みを行い、グループ内での意見交換や連絡調整、各種イベントの発表準備等にも大いに役立った。

コロナ禍の影響で中止に追い込まれる行事が多い中、残った数少ない大会や講演もほとんどすべてがオンラインでの実施となった。そのため、Google Meet や Zoom といったオンライン会議アプリを用いてそれらに参加や視聴する機会が増えた。生徒にとってはたとえリモートであったとしても、交流の機会をもてたことは有意義であったと思う。また、GIGA スクール構想に伴って新しいノートパソコンの配備や WiFi 環境の整備等が行われたことは、この事業の実施にとっては好都合であり有り難かった。今後は、会話用のヘッドセットの導入や、テレビ会議用の集音マイクや広角 web カメラ等の機材も徐々に揃えていきたいと考える。

それと共に、本校ホームページを通じた情報発信にも力を入れていきたい。従来からも SGH 事業の取り組みを発信してきた実績があり、本事業での取り組みの発信も同様に行う予定である。すでに令和元年度の情報は掲載済みであるが、今年度の分は現時点では更新が滞っている。コロナ禍の影響で掲載すべきコンテンツが不足していることも理由の一つである。この報告書の整理が終れば順次更新していきたいと計画している。さらには、一方的な情報発信だけでなく、関係機関や交流校との間で双方向での情報交換ができればと考えているところである。

#### ○海外研修、海外フィールドワーク等の取組について

SGH と共に開始した第 2 学年での海外研修については、行き先をシンガポールから台湾に変更後、今年度の第 2 学年が 2 回目の台湾海外研修を計画していた。新型コロナウイルス感染拡大の状況が好転することはなく、海外研修については中止となった。

また「課題研究 α」選択者（アドバンストコース）対象の海外フィールドワークについても、昨年度 3 月に引き続き、同理由で、中止を余儀なくされている。このことに関わっては、海外交流アドバイザーの仲介により、交流校との連携を継続した。交流校においても、担当者交代等の事情があり、2021 年内の交流は、難しい状況ではあるが、2022 年以降に、状況が好転すれば、何らかの形の交流ができるよう、策を講じていきたい。同時に、これまでの交流校とは異なる国・地域の学生たちとのオンラインによる交流も、模索中である。関係機関の支援も得ながら、具体的に進めていきたい。